

【用量】通常は、6～9gである。場合によっては12gまで増量できる。

【注意】陰虚火動による頭痛には、防風を用いるべきではない。

〈参考〉先人の著した本草書には、防風について「殺附子毒」という記載があり、防風と附子を一緒に用いると、附子の毒性を減少させることができる、また、防風と黄耆を一緒に用いると、黄耆の作用を増強することができる。とある。

使い分けのポイント

防風の祛風解表作用による全身疼痛の治療効果は荊芥よりも高いが、荊芥の祛風解表・発汗作用は防風よりも顕著である。臨床では、しばしば荊芥と防風は同時に用いられる。

しそ 蘇

関連生薬 しそこう 紫蘇梗・しそし 紫蘇子

【性味】味は辛，性は温で，その気には芳香がある。

【効能】紫蘇はおもに解表散寒に用いられるが，芳香理気・和胃止嘔の効能もあわせもつ。

- ①解表散寒・和胃止嘔 紫蘇は風寒感冒で，胸悶・嘔吐・胃部不快感などの症状があるもの（俗にいう「停食着涼」〔停食：胃もたれ・消化不良，着涼：カゼを引く・寒さに当たる〕）の治療によく用いる。藿香・荊芥・防風・陳皮・神麴などと配合することが多く，例として藿香正気散があげられる。最近の臨床経験からみると，急性胃腸炎の治療によく用いられている。
- ②芳香理気 紫蘇には香気があり，芳香により穢れを取り除くことができ，祛暑化濁・解魚蟹毒の作用がある。したがって，暑湿穢濁*・魚蟹中毒によって起こる胸悶・嘔吐・腹痛などの治療によく用いられる。
- ③その他 紫蘇に独活・蒼朮・檳榔子・牛膝を配合すると，脚気に用いることができる。また，石膏・白芷を配合して口臭に用い，香附子・麻黄を配合して発汗解表に用いられる。

【用量】通常は、6～9 gである。

【注意】紫蘇葉を用いるときには、一般的には「後下」と明記する必要がある。

【関連生薬】紫蘇梗・紫蘇子

紫蘇梗には理気安胎の作用があり、妊娠による嘔吐や腹脹などの治療によく用いられる。

紫蘇子の下気消痰作用は比較的顕著に現れ、肺気喘逆・痰嗽などの症状をよく治療するが、脾胃気虚で常に泄瀉するものへの使用は避けるべきである。

使い分けのポイント

解表散寒には紫蘇葉を、行気寛中には紫蘇梗を、和胃止嘔には紫蘇（梗と葉を一緒に用いる）を、降気消痰には紫蘇子（さっと炒してつぶす必要がある）を用いる。

きょうかつ 羌活

【性味】味は辛・苦，性は温である。

【効能】羌活のおもな効能は，辛温解表，祛風勝湿，太陽経と督脈経の陽気の上昇という3つである。

①辛温解表 羌活は，風寒感冒表証の治療によく用いられ，身体が冷えて無汗のもの，頭痛が顕著なものに明らかな効果がある。羌活は勝湿作用を兼ねるため，湿邪をあわせもった感冒（悪寒・発熱・身体が重い・骨節疼痛・横になりたがる・寝返りをうちたがらない）に，特に効果がある。

②祛風勝湿 羌活には，辛温解表薬としての働き以外に，「祛風湿」という大きな特徴があり，風湿相搏によって起こる全身の骨節疼痛・頸項の疼痛・背中の強痛・脊椎骨節の疼痛などに，効果がみられる。これらの経験をもとに，近年，風湿性〔リウマチ性〕関節炎・風湿熱〔リ